

2.8 検討項目 No.15 について

主な具体的検討項目	検討内容
江戸川放水路の自然再生の必要性とその方法を検討する。	江戸川放水路内の自然環境の状況を整理した。

現在の江戸川放水路の自然環境について資料を収集、整理した。

1) 放水路の概要

江戸川放水路は大正8年に開削された延長約3.5kmの放水路であり、現在の行徳可動堰は昭和32年に完成したものである。通常は堰のゲートを下げているが、放水路に維持流量 $0.028\text{m}^3/\text{sec}$ を流している。

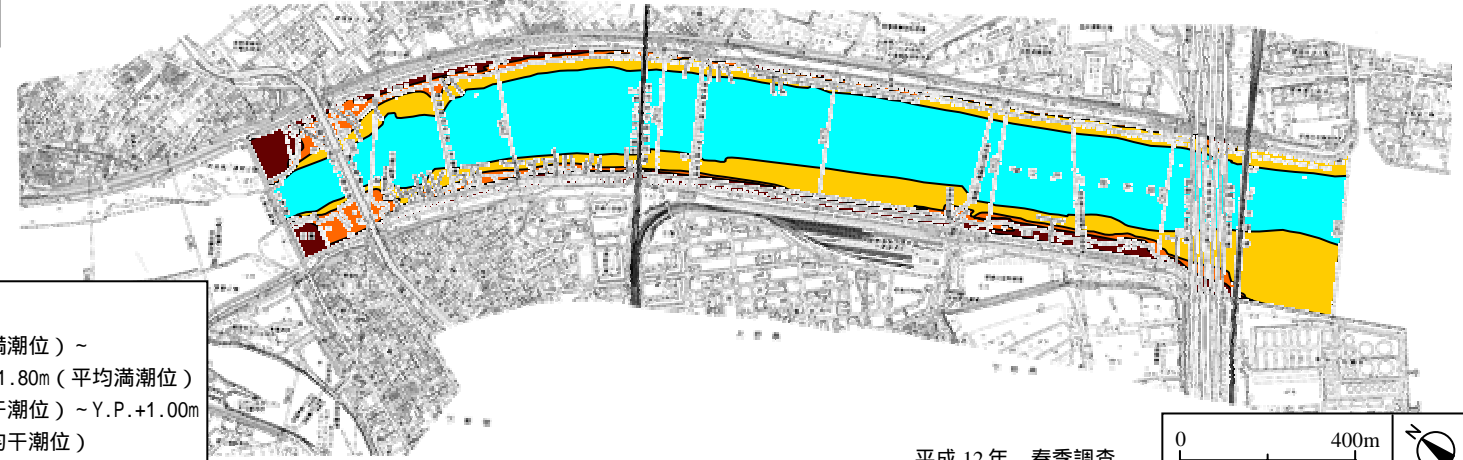
2) 自然環境の分布

江戸川放水路にはヨシ原や干潟があり、これらが生物の生息場として重要な機能を果たしている。江戸川放水路全体の環境分布は図2.8-1に示すとおりである。

干潟分布についてみると、行徳可動堰直下に泥干潟が広がり、その下流には左岸に砂(7~8割)/泥(2~3割)干潟、右岸に泥(7~8割)/砂(2~3割)干潟がみられる。河口付近は砂泥質干潟が広がっている。またヨシ原は、行徳可動堰直下と河口付近にみられる。

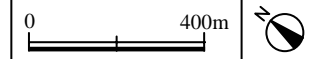
等深浅図(堰下流)についてみると、Y.P.+1.80m(平均満潮位)とY.P.+1.00m~Y.P.+1.80mは行徳可動堰直下に特に広くみられる。Y.P.-0.20m(平均感潮位)~Y.P.+1.00mは河口付近に特に広くみられる。

等深浅図（堰下流）

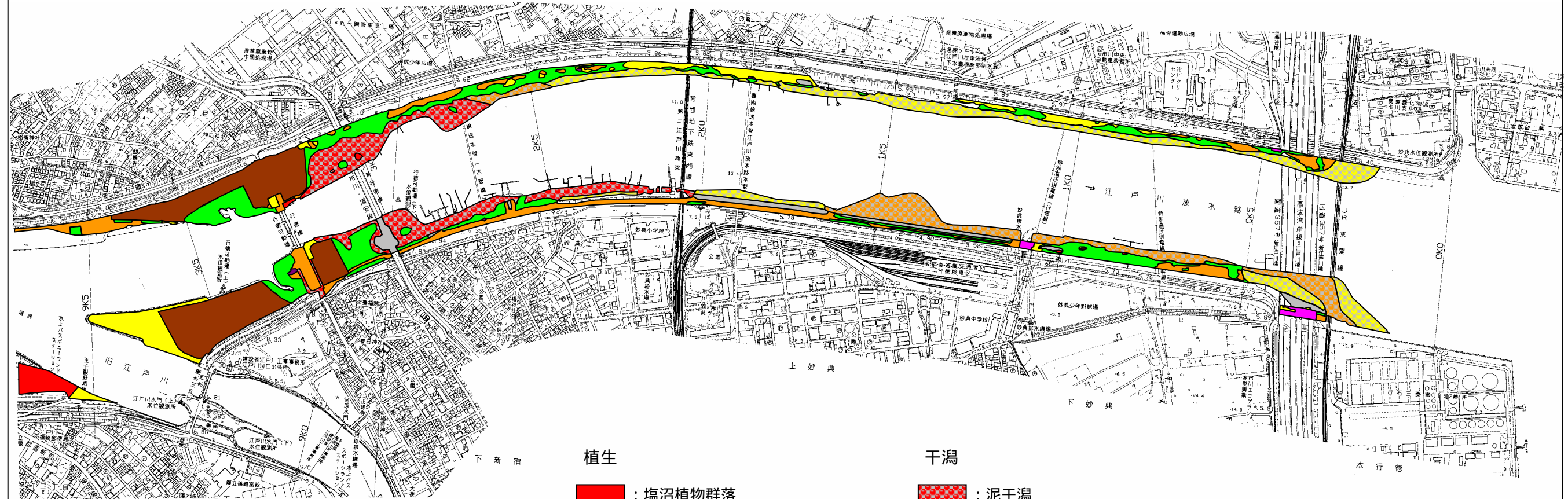


- 凡例
- : Y.P.+1.80m (平均満潮位) ~
 - : Y.P.+1.00m ~ Y.P.+1.80m (平均満潮位)
 - : Y.P.-0.20m (平均干潮位) ~ Y.P.+1.00m
 - : ~Y.P.-0.20m (平均干潮位)

平成 12 年 春季調査



出典：国土交通省江戸川工事事務所(2000)



植生

- : 塩沼植物群落
- : ヨシ群落
- : 柁・双柁等の単子葉植物群落
- : 三葎・セウカワガ 等々の低茎草木群落
- : 低木林
- : 人工草地
- : グラウンド等

干潟

- : 泥干潟
- : 泥(7~8割)/砂(2~3割)干潟
- : 砂(7~8割)/泥(2~3割)干潟
- : 砂、砂利干潟



出典) 国土交通省江戸川工事事務所資料 (1999)

図 2.8-1 江戸川放水路環境の分布 (1998 年度)

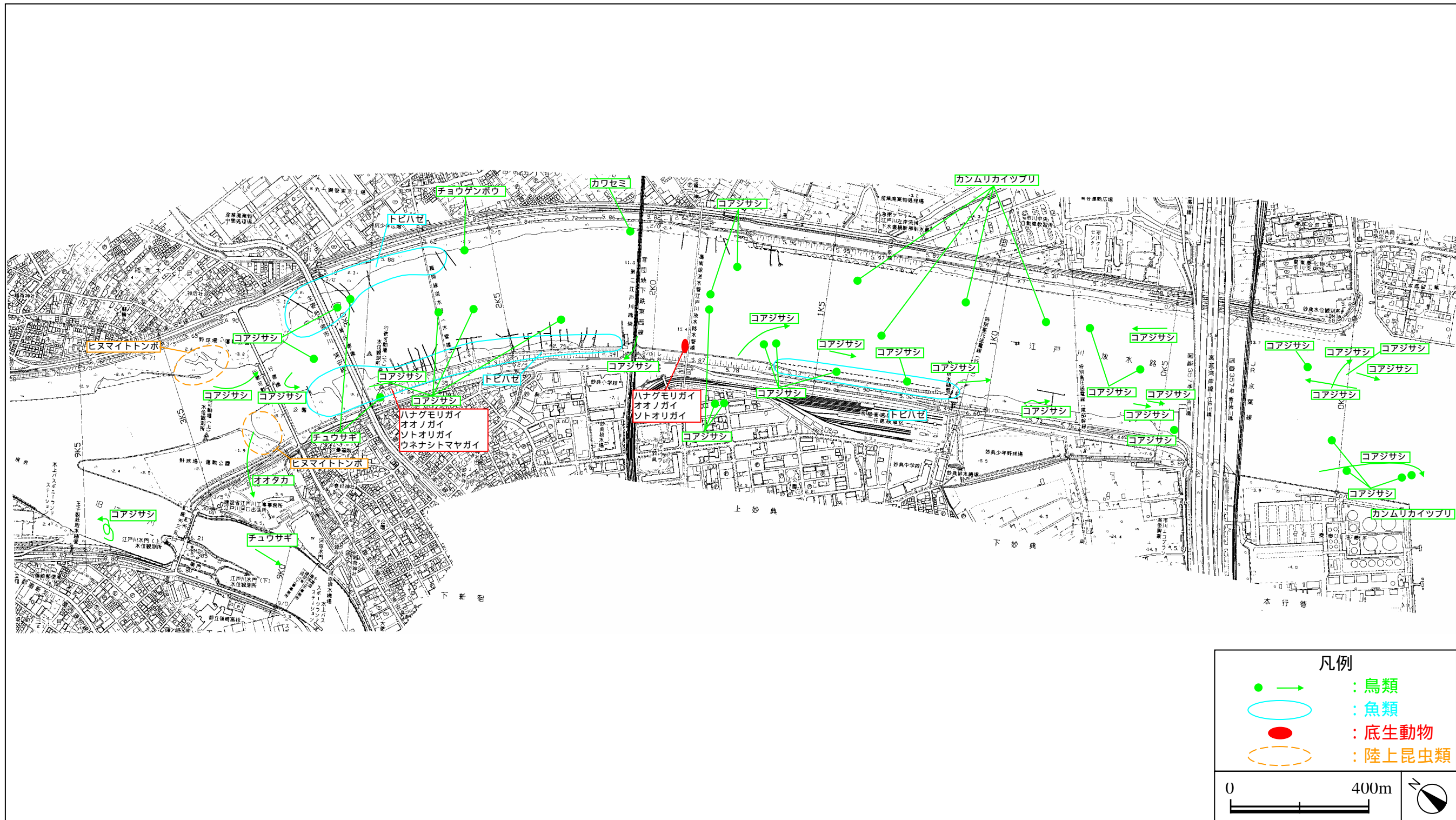
3) 生物の生息状況

江戸川放水路の新江戸川橋付近における生物出現状況を図 2.8-2 に示す。

江戸川放水路には、マハゼ、ボラなど汽水・海水性の魚類が多く生息し、干潟にはトビハゼ、ソトオリガイ、チゴガニなどの底生生物が生息している。また、シギ類、コアジサシなどのカモメ類も広域にわたって多くみられる。行徳橋上流側にはヒヌマイトトンボが生息している。また、江戸川放水路周辺ではこれまでに多くの重要種が確認されている。主な重要種の分布として、鳥類、トビハゼ、底生動物、ヒヌマイトトンボの状況を図 2.8-3 に示す。

4) まとめ

江戸川放水路にはヨシ原や干潟などがあり、多くの生物が生息している。また、トビハゼやヤマトオサガニなど泥干潟に生息する種類やウネナシトマヤガイのように汽水環境に特有な種類など、三番瀬と違った種類の生物の生息が確認されている。さらに、多くの鳥類が利用していることなどを考慮すると、江戸川放水路は、三番瀬の背後地として様々な生物の生息場になっていると考えられ、後背湿地の保全・再生を図るというアプローチにおいては、緊急的な対応は必要ないものと考えられる。



出典) 国土交通省江戸川工事事務所 (2000) より作成

図 2.8-3 主な重要種の確認位置 (鳥類、魚類、底生動物、陸上昆虫)

引用文献

- ・国土交通省江戸川工事事務所（1999）：平成10年度行徳可動堰周辺環境調査報告書
- ・国土交通省江戸川工事事務所（2000）：ヒヌマイトトンボ専門委員会資料